

## 〈特集〉 人生100年時代のワークスタイル

― 走る。歩く。止まってみる。 ―

二〇世紀の後半のいわゆるバブル期に社会・経済の中心となり、その時代を駆け抜けていたのはホワイトカラーと呼ばれるビジネスマンであった。この時代はビジネスマンに関わる流行語が非常に多かったことから、日本社会の象徴となる存在であったことが想像できる。例えば、一九八八年に流行したのは（ユーキャン新語流行語大賞）、「五時から男」という言葉で、仕事で疲れ切った男性が五時から栄養ドリンクを飲んで疲れ知らずに遊びまわるというCMからきたものである。また、一九八九年には「二四時間タカエマスカ」（企業戦士として戦うビジネスマンが登場する栄養ドリンクのCM）や「濡れ落葉」（仕事で疲れきった夫、それとは対照的に体力、気力、バイタリティに満ちあふれた妻という、夫婦関係を表現した言葉）が流行している。日本人の勤勉が美談とされていた時代である。それから時

代は流れ、二〇一三年になると「ブラック企業」という言葉が流行した。極端な長時間労働や過剰なノルマ、残業代・給与などの賃金不払が疑われる企業や働き方に批判が集まるようになる。

「サラリーマンの生活と生きがいに関する調査（公財）年金シニアプラン総合研究機構」によると「生活にはりあいや活力をもたらしてくる場」について、一九九一年（第一回調査）では「仕事・会社」という回答が六〇・〇％であったのに対して、二〇一七年（第六回調査）では二四・九％と急激に減少している。二十数年という間で個人の「働く」ということに対する価値観が大きく変化している。しかし、企業側が求める働き方には大きな変化はなく、「効率重視」という価値観、しがらみから解放されることができない企業・組織も多い。そもそも「効率」とは機械に対して用いられていた言葉であり、広辞苑では、「機械によってなされた有用な仕事の量と機械に供給された全エネルギーの比」と定義されている。ビジネスだけでなく教育の現場でさえも、「効率」という言葉が多用されているが、これは、生産現場の中で追及されてきたものに他ならない。「効率」は人類発生以来からの課題であった。狩猟・採集の時代、農耕牧畜の時代から追及されてきたものであり、これを加速化させたのが産業革命である。効率化が生活の安定をもたらしていたのは言うまでもないこと

である。しかし人間は機械ではない。効率化の概念を人間にまで適用することは、人間本来の能力の発揮を妨げるであろう。走り続けるだけではなく、時には歩き、時には立ち止まることも重要なのである。

今回は本誌の特集として「人生100年時代のワークスタイル 走る。歩く。止まってみる。」をテーマとして設定した。「ワークスタイル」という言葉から連想されるのは、リモートワーク、フレックスワーク、ダブルワークのような手段にフォーカスされることが多い。しかし、経営者やアスリートのように企業や組織からの縛りが少ない人ほど、ワークスタイルというものに、仕事や人生に対する哲学が表出されることがある。例えば、野球のイチロー選手は、翌日のゲームの開始時間から逆算して、練習時間はもちろんのこと、寝る時間、起きる時間、食事の時間など、全てのスケジュールを決めていることで知られている。ランチにいつもカレーを食べていることも有名で、ある時期に朝カレーがブームになったこともあった。このことからわかるように、人はどうしても目に見える手段をフォーカスしてしまいがちであるが、そこに込められた意味や哲学こそ非常に興味深いものがある。

特集の企画を始めた当初の一月は、まだ新型コロナウイルスが中国で流行しているというニュースのみを目にする状況であった。その後、世界中が混乱の渦に巻き込まれ、その結果

として、私たちのワークスタイル、生活スタイルに極めて大きな変化をもたらすことを想像もしていなかった。二〇一七年に政府が「働き方改革」を推進したものの、なかなか企業に定着されなかったが、新型コロナウイルス禍に大きく前進することになった。今回の特集では多様なフィールドの方々から執筆いただいたが、この特集を通して、自身の働くことに対する価値観や人生観を思考するきっかけになれば幸いである。

須藤 美音